論　説

19世紀前半のイランとイギリス製小銃

小　澤　　一　郎

は　じ　め　に

火薬の爆発力を利用して弾丸を発射する火器のうち個人で携行可能な小火器の分野では，19世紀後半に西ヨーロッパ地域と北米において，小銃機構そのものの発展と工作機械の使用を基礎とする製造分野での技術革新が発生した。その人類史への影響についてはこれまで様々に論じられてきている。しかし従来の研究では，それら革新は「列強」の他地域への進出を可能にした一要因として評価される傾向が強く，結果としてヨーロッパ中心主義史観を補強する役割を果たしていた。列強の進出と新技術との関連を論じたヘッドリクの研究はその代表例と言える［ヘッドリク 1989］。インド洋世界における武器拡散を考察したチューの研究は，小銃の拡散における現地側の要因および結果として生じた変化を視野におさめてはいるものの，問題を基本的に中心（西ヨーロッパ）・周縁（インド洋世界）の関係においてとらえる点でこの観点を踏襲しているといえる［Chew 2012］。

各国史および地域史のレベルでは，本邦の幕末・明治初期に関する研究のようにこの問題に関しては一定の研究蓄積があるが，より多くの地域について現地側の視点に立った事例研究を蓄積し，その比較および相互連関の問題を考察することによって，この現象が人類史に与えた影響に関する総合的な理解を深めていく必要がある。

著者は19世紀のイランを事例として19世紀後半に生じた小銃技術の進展のインパクトを明らかにすることをめざしている。そこで本論考ではその前提として，変化の生じる直前の19世紀前半におけるイランへの小銃と関連技術の流入，及びその影響について考察し，19世紀後半における変化と継続の問題を考える上での手がかりとし

たい。

19世紀イランへの小銃と関連技術の流入はこれまで本格的な学術研究の主題となったことはなかった。ガージャール朝下の軍制改革に関する研究［Calmard 1989; Cronin 2009］や，イランにおける知識や技術に関する諸研究［Maḥbūbī Ardakānī 1354: vol. 1, 196-208; Floor 2003: 186-269］も，火器や技術の導入の事実を指摘するのみでその意義にまで踏み込んではいない。また上記研究では，「西欧」からのモノや技術の移転は半ば自明のものとされており，現地の事情がいかに小銃の導入に結びついたのかも不明なままである。

一方で，19世紀後半以降ペルシア湾などを通じた武器取引によって流入した小銃が部族など地方勢力の武装化を招いたとの指摘がなされているが［Matthee 1999: 625-626］，このことの意味も19世紀の武器流入の通時的分析を経て初めて明らかになると思われる。

これらを踏まえ，本論考では19世紀前半のイギリス帝国からイランへの小銃と関連技術の導入の再検討を行う。この時期のイランへの小銃と関連技術導入の導入元はイギリス帝国にほぼ限定されており，この問題を検討することで同時期のイランへの外部からの小銃及び技術の流入をめぐる状況の全般的把握が可能となる。具体的には，イギリス製小銃流入の過程とその意味，小銃流入と当時のイランの情勢，特に西欧式歩兵部隊サルバーズ Sarbāz 創設との関連，小銃製造技術の流入と現地側の反応に関する分析を踏まえ，19世紀前半のイランへの小銃及び関連技術の性格とそのインパクト・限界を明らかにしたい。

1．19世紀前半までのイランにおける小銃の保有・製造

イランでは15世紀中ごろから火器の使用が始まった。火器の導入はその初期においては限定的であったとされているが［Matthee 1996］，サファヴィー朝（ca. 1500-1722）末期までに少なくとも小火器の保有は軍隊のみならず周縁部や一般の人々の間でも行われるようになっていた［Matthee 1999: 623］。サファヴィー朝滅亡後のイランの政治状況は，若干の時期的・地域的例外を除けば恒常的な不安定性によっ

て特徴づけられるが，この時期各地に割拠した地方有力者は，銃兵隊 tofangchī を利用して政治抗争を乗り切ったり，地域社会の安全を保障して統治の正当性を担保していた［近藤 1993: 7-8; 1998: 130-132］。さらに，治安の悪化は自衛手段としての小銃保有の一層の広まりをも促したと考えられる。

ガージャール朝成立以降も，こうした小銃をめぐる状況はあまり変化しなかったと考えられる。王朝創建当初，シャーや王子たちはそれ以前の地方有力者たちと同じくそれぞれ小銃を装備した近衛兵集団を維持し，自身の権力の確立・維持に利用していた(1)。また19世紀前半当時，ガージャール朝政府は治下の臣民の武器保有を制限していなかった。1834年，当時のシャー，ファトフ・アリー Fatḥ ʻAlī Shāh（位1798-1834）の後継を巡る争いが激化するという緊迫した政治状況下で，人々が銃鍛冶から武器を買い求めていたという記録はこれを裏付ける［Fraser 1838: vol. 2, 111］。またガージャール朝はその軍事力の大半を部族騎兵などの不正規軍に頼っていたが，それらの兵は武器を自弁しており，この点からも武器保有の制限は現実的なものでなかった［Malcolm 1815: vol. 2, 498; Fraser 1834: 217］。

小銃の広範な保有・利用を背景に，19世紀前半までのイランの小銃製造は活況を呈していた。主要都市のバーザールに銃鍛冶が存在していたことは，当時イランを訪れた旅行者たちの記録から明らかとなる(2)。また，著名な銃鍛冶の個人名が史料中に現れることも注目すべきである。年代記 *Maʼāser-e Solṭānīye* にはハサン・ジャザーイェリー Ḥasan Jazāyerī とムーサー Mūsā という銃鍛冶の名前が挙げられている(3)。モハンマド・シャー Moḥammad Shāh 期（1834-1848）のエスファハーンにもホセイン Ḥoseyn という銃鍛冶がおり，地方誌では彼の銃とハーッジー・モスタファー Ḥājjī Moṣṭafā なる銃鍛冶の銃の比較が行われている［Taḥvīldār 1342: 108］。銃鍛冶の個人名が記録されていること自体，当時のイランにおける小銃製造の活発さを物語るものである。イラン製の武器は他地域にも輸出されて高い評価を受けており(4)，また銃鍛冶が他地域に赴いて銃の製造に従事することもあったという(5)。

また，主要都市に政府側が創設した兵器製造所でも小銃の製造・修理が行われていた。1811年のテヘランでは，城塞の門の付近に武器庫 Jebbeh-khaneh (jobbekhāne) があり，小銃，ピストルなどの清掃，修理が行われ［Ouseley 1819-23: vol.3, 119］，1820年代前半のタブリーズでも，城塞内の兵器製造所で小銃や弾丸などの武器が製造されていたという(6)。

この時期のイラン製の小銃には様々な種類があるが，ピストルを除けば西ヨーロッパ地域のそれに比べて銃身が長く，これはイランの人々の好みを反映していた［Elgood 1995: 121］。発射機構については，既にフリントロック式の小銃も知られていたがその導入は一部に限られていたとされ，大部分は火縄銃であったと考えられる［Matthee 1999: 623］。

一方，イギリス本国を含む西ヨーロッパ地域における小銃は，17世紀後半にフリントロック式小銃が登場して一応の完成を見，以降19世紀後半まで大きな変化を経験しなかったため［ヨルゲンセンほか 2010: 52-57］，19世紀前半時点で西ヨーロッパ地域製の小銃は弾丸の前装，滑腔の銃身などの基本的な構造原理においてイランのそれと共通する面を多く持っていた。小銃製造業に注目すると，イギリス本国のそれは，イングランド中部の都市バーミンガムへの一極集中と，非常に多くの労働者を動員した労働集約的分業体制によって特徴づけられるが，19世紀前半の段階でも依然として大部分の工程を熟練手工業に頼っていた［横井 1997: 95-96］。すなわちイギリス本国の小銃製造業は，主要都市に分散し，比較的少数の職人たちによって行われていたと考えられるイランのそれ(7)とは製造規模・体制の面で異なっていたが，熟練手工業に依存していたという点で両者の小銃製造技術の間には19世紀後半以降の時期ほどには大きな違いがなかったといえる。

2．イギリス帝国からイランへの小銃の導入

本章では，イギリス帝国からイランへの小銃の導入の過程を跡付ける。まず，小銃流入の主要な流路となった武器供与の過程を追い，

その背景となる諸要因を指摘する。また，武器供与以外の方法で小銃が流入した可能性についても合わせて検討する。

2-1．イギリス帝国からの武器供与

19世紀初頭，ロシアとの軍事的衝突という事態に直面したガージャール朝はロシアを共通の敵とするフランスに接近し，軍事使節団派遣などの援助を受けたが，1808年のティルジット条約締結でフランスの対ガージャール朝接近の動機づけが失われ，使節団も退去した。その直後イラン入りしたイギリス本国の使節ジョーンズ Harford Jones とガージャール朝当局との交渉の結果，1809年には両政府間で予備条約 Preliminary Treaty が締結されたが，そこで対ロシア戦のためにイギリス帝国が武器供与を含む軍事的援助を行うことが取り決められ，これを画期として武器供与が開始される。1810年2月に英領インドの使節マルコム John Malcolm がブーシェフルに到着した際，小銃35000挺を携えていたとされ，これがイギリス帝国のガージャール朝に対する武器供与のうち史料上で確認できる最初のものである［Jones Brydges 1834, vol. 1: xxviii］。同年3月には「ペルシアの新兵 new levies in Persia」のために小銃16000挺ほかを英領インドから供与すること，さらに小銃4000挺をイギリス本国もしくはインドから送られることが決定された。これに従い，翌年1月までにはカルカッタ，ボンベイから小銃16000挺の供与が行われ(8)，同年5月には特命全権大使ウーズリー Gore Ouseley の派遣に合わせて本国から小銃4000挺がガージャール朝側に供与された(9)。

1812年に両政府間で最終条約 Definitive Treaty が締結されると，ガージャール朝側から皇太子アッバース・ミールザー ‘Abbās Mīrzā が創設する「規律ある軍隊 disciplined troops」の使用に供するための小銃と装具の供与が要請された(10)。これに応じる形でまずボンベイ政庁から小銃6000挺が供与され，さらにこれに追加して，ボンベイ，マドラス，カルカッタ各政庁からそれぞれ6000挺，7000挺，17000挺の合わせて30000挺の小銃が供与された(11)。アッバース・ミールザーの軍制改革を概括した *Ma'āser-e Solṭānīye* の記述はイギ

リス製小銃6000挺がもたらされたと述べ［Donbolī 1352: 131-132］，また複数の年代記にはウーズリーがイギリスの小銃30000挺を将来したとの記述があるが，これは上記の経緯を反映したものと思われる［Lesān al-Molk Sepehr 1377: vol. 1, 208; Shīrāzī Khāvarī 1380: vol. 1, 334］。

この後，1829年２月には小銃2000挺がマドラス政庁からアッバース・ミールザーに供与され，同年にはさらに小銃3000挺がアッバース・ミールザー宛に発送された(12)。このうち後者については，輸送の問題から供与物品がバグダードを経てケルマーンシャーに到着したのはアッバース・ミールザー死去後の1835年４月となった。到着した小銃はローリンソン Henry Rawlinson 指揮下の部隊に配備するため同地に留め置かれた(13)。

1833年にアッバース・ミールザーが死去し，ファトフ・アリー・シャーの健康状態も悪化して政治的緊迫の度が高まると，イギリス帝国はアッバース・ミールザーの長子であり，彼の死後皇太孫兼アゼルバイジャン総督となっていたモハンマド・ミールザーへの支持を鮮明にした。本国外務省は彼への軍事支援の一環として1834年７月にインド型マスケット India Pattern Musket 2000挺と装具のモハンマド・ミールザーへの贈与を決定し(14)，イスタンブル・トラブゾン経由でタブリーズへと発送された(15)。1836年１月のタブリーズの軍備に関する報告には，「トラブゾン経由で運ばれたイギリス製マスケット2000挺が兵器庫に加えられた」とあり，この時までに供与物品が到着していることが分かる(16)。

1834年10月のファトフ・アリー・シャーの死去後，モハンマド・ミールザーはテヘランに入城してシャー位に即位するが，その後の1836年７月にはライフル銃2000挺と装具，フリント（火打石）50万個の贈与が準備され(17)，テヘランに届けられた。しかし，1837年夏にガージャール朝軍によるヘラート遠征が開始されてイギリス帝国・ガージャール朝関係が悪化した結果，1838年６月には公使マクニール John McNeill がガージャール朝との断交を宣言してガージャール朝領からを退去するという事態に発展したため，当該物品の供与は棚上げされることとなった(18)。ライフル銃が最終的にガージャー

ル朝側に引き渡されたのは，遠征失敗後，両政府間関係がひとまず安定した1842年５月のことである(19)。

このように，19世紀前半を通じてイギリス帝国からの武器供与によって10万挺近い小銃がガージャール朝側に引き渡された。しかし，1837年のヘラート遠征はイギリス帝国のインド防衛政策におけるガージャール朝の重要性を低下させた。これ以降，イギリス本国政府および英領インド政府がガージャール朝へ武器を供与する事例は見られなくなる。

２-２．武器供与の政治・外交的背景

ここでイギリス帝国からガージャール朝への武器供与の背景について述べておきたい。19世紀前半，ガージャール朝はイギリス帝国の戦略上，英領インドを防衛するための「緩衝国家 Buffer State」とみなされていた［Yapp 1980: 1-2］。ガージャール朝の政治的・軍事的自立性を維持しつつイギリスの影響下に置くというこの戦略のもと，イギリス帝国からは様々な軍事援助を行われ，武器供与もこの政策の一環として行われたのである。

この政策の要となったのがアッバース・ミールザーとその子モハンマドであった。アッバース・ミールザーは皇太子指名後，首都テヘランに次ぐ枢要の地であり，また対ロシア防衛の要であるアゼルバイジャン州の総督に任命されて対ロシア戦争を指揮していた。ロシア帝国の南下を警戒するイギリス帝国にとって，彼への支援は戦略上重要であった。また，ガージャール朝には明確な継承原理が存在しなかったため，将来ファトフ・アリー・シャーが死去した場合後継者争いが生じる危険性があった。「緩衝国家」としてのガージャール朝の自立性を維持したいイギリス帝国としては，この政治的混乱を未然に防ぎ，アッバース・ミールザーのシャー位継承を確実にする条件をも整えておく必要があったのである。そしてイギリスの支持は，アッバース・ミールザー本人や，彼への継承を円滑にしたいファトフ・アリー・シャーの思惑とも合致していた。ガージャール朝においてシャー位継承の裏づけとなったのは軍事力と諸外国の支

持であり［Ebrahimnejad 1999: 289-295］，イギリス帝国によるアッバース・ミールザーへの軍事的支援はその両方を満たすものであったからである。アッバース・ミールザー死後，イギリス帝国がモハンマド・ミールザーへの支持を打ち出したのも，以上の経緯から考えれば当然の成り行きであったといえる。

このような状況下で，1808年の両政府間の条約締結から1838年のイギリス大使の退去まで，ガージャール朝に対する軍事援助は基本的にイギリス帝国からのものに限定され，それ以外の勢力から武器供与を得ることはなかった。1840年代にはフランスから軍事使節団を受け入れるが，使節団自体成果なく帰国しており［Calmard 1989: 26-27］，武器供与が行われた事実も確認できない。次章で取り上げるガージャール朝軍の小銃配備状況にみられるイギリス製小銃の圧倒的な存在感もこうした事情を反映しているといえる。

2-3．武器供与以外の小銃流入

1830年代以降，ガージャール朝政府は主体的にイギリス帝国からの小銃の調達に乗り出した。1836年5月にはイギリス人バージェス Charles Burgess が小銃を含む武器購入のためロンドンに派遣されたが，彼は購入資金を持って逐電し，目的は果たせなかった［Wright 1977: 97］。1837年5月にはガージャール朝政府が，ペルシア商人のインドでの武器購入に便宜を図ることを英領インド政府に依頼したが，ヘラート遠征を巡る関係悪化のためにこの依頼は却下されたものと考えられる(20)。また，1842年にはインドでガージャール朝のために購入された武器が英領インド当局に没収される事件が起こっている(21)。このように，19世紀前半までのガージャール朝による小銃調達の試みはおおむね不成功に終わった。

一方で，1840年代末以降イギリス商人の中にも，ロンドンの商社ミルズ Mills & Co. やバグダードを拠点とするアレクサンダー・ヘクター Alexander Hector のようにガージャール朝政府への小銃売却にかかわる者たちが現れる［Wright 1977: 98］。このような商人による武器の売却は1840年代末以降観察される新現象であり，その実態

は後代との関連も含めて今後の検討課題としたいが，少なくとも19世紀前半にはその活動は限定的であった。

政府が直接関与しない小銃流入としては，イギリス製小銃が贈答品としてもたらされた事例が観察される。ウーズリーはシーラーズ総督ホセイン・アリー・ミールザー Ḥoseyn ‘Alī Mīrzā にピストルとイギリス製の火薬・フリント，シャーには小銃とイギリス製火薬を贈呈した［Ouseley 1819-23: vol. 2, 212; vol. 3, 172］。ファルハード・ミールザー Farhād Mīrzā 所有とされるウォルヴァーハンプトン製のピストルもイギリス人の贈答品であろう［Sengers 1965］。しかし，贈与という性格上その流入規模は小さかったと考えられる。その他，密輸の形で小銃が流入した可能性も否定できないが，史料の不足からその分析は困難である。

イギリス製小銃の需要について，マルコムは1813年 3 月のイギリス議会下院の証人喚問で特にピストルへの需要が有力者の間に存在すると述べており［*Parliamentary Papers*: 62］，また1850年代においても富裕な者たちはイギリス製小銃を好んだという(22)。しかしマルコムは前掲の証言に続けて，イランでは高価なイギリス製小銃の代わりに現地やトルコ製の小銃が用いられており，有力者たちもただで入手することを望んでいたとも述べている。このことから，有力者の間でのイギリス製小銃の需要はあくまで「舶来品の珍重」程度に留まっていたと考えられる。また，次章にて述べる通りイギリス製小銃は現地製のそれに比べて優れた点を幾つか有していたが，両者に決定的な構造上の差異がないことや現地の小銃製造の盛行といった事情を勘案すると，比較的高価なイギリス製小銃はイランにおいて広範な需要を生み出さなかったと思われる。イギリス帝国を初めとする西ヨーロッパ地域製の小銃が軍隊以外で一般に普及していた証拠も同時代史料上からは確認できないので，この時期に，世紀後半に見られるような政府の関知しないルートでのイランへのイギリス製小銃の流入および軍隊外の一般の人々への普及が大規模に起こったとは考えにくい。

本章での分析から，19世紀のイギリス帝国からイランへの小銃の

流入は政府主導の武器供与にほぼ限定されていたことが明らかとなった。この状況は，密輸など政府の関知しない形での武器流入の拡大が地方勢力の武装化を招いた世紀後半の状況とは大きく異なっている。この問題は，19世紀後半に起きた小銃技術の発展のイランへの影響を考える上で興味深いが，本論考におけるこの問題の考察はここで一旦終え，次章では，イギリス製小銃導入の現地側での動因となった西欧式歩兵部隊創設について考察を行う。

3．イギリス製小銃とガージャール朝下の軍制改革

イギリス帝国からイランへの武器供与の目的は，アッバース・ミールザー及びモハンマド・シャーへの軍事的支援，具体的には西欧式歩兵部隊サルバーズの創設に対する援助であり，この時期イギリス帝国からイランに流入した小銃は専らこの目的に利用されたと言える。そこで，本章ではより具体的に，武器供与と当時ガージャール朝下で進められていた軍制改革との関連とイギリス製小銃導入の意味，及び配備状況についての考察を行う。

3-1．ガージャール朝の軍制改革と小銃流入

ガージャール朝下では19世紀初頭のロシアとの戦争を契機として，各地で西欧式軍隊の創設を目指す改革が進められた。それらの大半は既存の銃兵隊の再組織化・拡充に過ぎなかったと考えられるが(23)，皇太子としてガージャール朝の軍事行動において重要な役割を果たしたアッバース・ミールザーは，アゼルバイジャン州において西欧式歩兵部隊であるサルバーズの創設を主眼とする大規模かつ本格的な軍制改革を推進した［Calmard 1989: 22-25］。そしてイギリス帝国の軍事支援も彼によるこの改革を後押しする形で進められていくことになる。1810年には英領インドから軍事使節団がアゼルバイジャン州に派遣されてこの改革を主導し，アゼルバイジャン州においてサルバーズ12000名と砲兵2000名を主力とする新たな軍隊が創設された。この使節団は条約更新における紛糾から1814年までには大半が退去したが，ベシューン Henry Lindsay Bethune を初め

とする数名の将校は残留して部隊の訓練・指揮に当たった［Wright 1980: 49-56］。武器供与がこうした流れに沿っていたことは，供与の大半がアッバース・ミールザーに対して行われ，かつ供与の目的として彼の創設する「ペルシアの新兵」や「規律ある軍隊」への配備が挙げられていること，および当時の旅行者たちがイギリス製小銃を装備したサルバーズを目撃していること［Ouseley 1819-23: vol. 3, 419; Buckingham 1830: vol. 1, 428-429］から明らかである。

モハンマドが1834年に即位すると，サルバーズの編成は既存の部隊を基幹とし，その他の諸部隊を取り込む形でガージャール朝領内各地に拡大される(24)。そして，1835年に英領インドから派遣された新たな軍事使節団は各地で新たな軍隊の創設に当たった［Wright 1980: 56-57］。1835年４月にケルマーンシャーにもたらされた小銃がローリンソンの指揮下で編成途中であった部隊に配備されたことから，武器供与とこのイギリス軍事使節団の活動との関係は明らかであろう。また1835年のライフル銃供与に際しても，ライフル銃を装備した狙撃兵部隊組織の目的でウィルブラハム Richard Wilbraham らが派遣されており［Wright 1980: 57-58］，ここにも武器供与と新軍創設の関連性が見て取れる。

３-２．イギリス製小銃とイラン製小銃

それでは，軍制改革に際してなぜイギリス製小銃を導入する必要があったのだろうか。

供与対象となった小銃は，1835年に供与されたライフル銃を除けば史料上すべて「マスケット musket」と記されている。マスケットとは前装式で銃身に施条の施されていない歩兵銃を指す語であり，このタイプの小銃は19世紀前半までに西ヨーロッパ地域の軍隊で歩兵の標準的装備となっていた。ここから，供与された小銃はイギリス製のフリントロック式マスケット，通称「ブラウン・ベス Brown Bess」［ヨルゲンセンほか 2012: 75］であったことはわかるが，史料上具体的な種類が確認できるのは1834年にイギリス本国から供与された「インド型マスケット」のみである。ただしこの「インド型マ

スケット」は，元来小銃供給のほぼすべてをバーミンガムからの輸入に頼っていた東インド会社が会社軍の制式銃として採用していたものであり，ナポレオン戦争時の兵器不足から徴発されて本国陸軍の制式銃としても採用された［横井 1997: 105; Chew 2012: 52］。先に見たように小銃供与の大部分は英領インド政庁から行われているから，19世紀前半にガージャール朝に供与された小銃は大半がこの「インド型マスケット」であったと考えてよいであろう。

イギリス製小銃の導入の理由としてはまず，小銃の最も基本的な評価点たる命中精度や有効射程などが当然想定されるが，少なくともマスケットに関してはこれらの点についての言及を史料中に見出すことは出来ない。よって，何か別の理由を考える必要がある。

これに関して，まず考えられるのがフリントロック式発射機構の問題である。この発射機構は，19世紀初頭のイランで一般的であった火縄式と比較して操作が容易であり，また天候に左右されない，火縄を用意しておく必要がないなどの利点があった。イギリス人将校到来以前の1808年，ファールス地方で総督の近衛である銃兵隊にロシア式調練が施されたが，この際，火縄式 matchlock 小銃に代えて生産地は不明ながらフリントロック式 firelock 小銃の配備が行われているから［Morier 1812: 30-31; 長谷川 1992: 9］，フリントロック式小銃の導入は当時のガージャール朝におけるサルバーズを含めた西欧式歩兵部隊創設におけるキーポイントの一つであり，イギリス製小銃導入もその流れの中で行われたといえる。

また，先に触れた *Ma'āser-e Solṭānīye* のイギリス製小銃6000挺の供与に関する記事で「その弾はすべて一つの鋳型 qāleb から（作られ），（小銃は）すべて同じ構造 sākht va andām である」と形容し［Donbolī 1352: 133］，イギリス製小銃の規格の統一を強調していることも注目に値する。この一節がアッバース・ミールザーの改革を総括する文脈で登場すること，この記事の指す小銃が上述の「インド型マスケット」であると考えられることから，これは当時導入されたイギリス製小銃に対する一般的評価であると言ってよい。イギリス帝国の軍用銃は18世紀前半以降，政府の介入の元に一応の規格に

基づいて製造されていた［Chew 2012: 61］。規格化という志向を持っていなかったと考えられるイラン製の銃に比べれば，その画一性が際立つことは言うまでもない。そしてこの規格性という特徴は，歩兵の斉一的行動を要求する当時の西欧式歩兵戦術に必要であっただけでなく，大量の小銃の部品の交換・修理や弾薬の供給を統一的かつ効率的に行う上でも不可欠なものであった。

以上のように，イギリス製小銃は発射機構と規格の統一の２点で評価されていたと考えられ，後者は西欧式の大規模な歩兵部隊の創設と運営の面で重要であった。対ロシア戦争を控え，軍制改革に必要とされるこれら条件を備えた小銃を大量に，且つ早急に入手するに際しては，各都市の小銃製造規模が比較的小さかったと考えられる在地の小銃製造業に頼るのは難しく，当時のガージャール朝をめぐる外交的状況も考慮すれば，イギリス帝国からの小銃供与に頼るほかなかったのである。

３-３．イギリス製小銃の受容状況

イギリス製小銃の供与がガージャール朝下の軍制改革に与えた影響の大きさは，サルバーズへのイギリス製小銃の配備状況から明らかになると思われるが，ここではとりあえず，1840年代のガージャール朝軍および兵器庫の武器保有状況に関するゴレスターン宮殿図書館所蔵の写本 *Ketābche-ye tūpkhāne* からその状況の一端を垣間見ることとする。当該史料は1840年代にホセイン・ハーン・アージューダーンバーシー Ḥoseyn Khān Ājūdābāshī によってまとめられたものであり，ガージャール朝治下各地・各部隊の火器保有状況，および各地の兵器製造所の製造実績が表形式で表わされている。小銃はその数のみならず製造場所や形式による分類がなされており，この時期の小銃の保有状況およびイギリス製小銃のプレゼンスを明らかにする上で重要な史料である。

同史料ではまず，ガージャール朝治下のサルバーズ諸連隊 fowj における小銃の配備状況を記している。小銃の種類に基づいた分類がなされているのは全55連隊中8連隊についてのみであり，どのよ

うな小銃がどれだけ配備されていたか，その全体像は明らかとはならない。しかし，分類のなされている8連隊のうち6連隊では配備されている小銃のうち「イギリス銃（tofang-e）Angrīzī」が半数以上を占めている。すなわち第2軍団 tūmān の第5連隊（セムナーン）で全680挺中500挺（残余は「エスファハーン銃（tofang-e）Eṣfahānī」180挺），第3軍団の改宗者連隊 fowj-e bahādorān で全800挺中650挺（エスファハーン銃150挺），第6連隊（ファラーハーン）で全757挺中660挺（「キズィルバシュ銃（tofang-e）Qezelbāshī(25)」97挺），第7連隊（ボズチャルー）で全815挺中694挺（キズィルバシュ銃121挺）［fol. 6b］，第4軍団の第3連隊（キャマレ）で470挺中400挺（キズィルバシュ銃70挺），第5軍団の偵察兵 mokhberān の連隊（ザランド）で全201挺中110挺（エスファハーン銃91挺）である［fol. 7a］。最も早くに創設され，したがって装備や訓練の面でイギリスの影響を最も強く受けていたと考えられる第1軍団所属のアゼルバイジャンの諸連隊についてはイギリス製小銃の配備比率はこれらの連隊より高かったと考えられるので，全体としてサルバーズの諸連隊ではイギリス製小銃が広く用いられていたと推測出来る。

また，同史料は続いて，テヘランの武器庫 jobbekhāne に所蔵されている小銃について記録しているが，そこでは全小銃14744挺のうち，イギリス製小銃は2444挺である。これは，「様々な銃 tofang-e motafarreqe」3179挺を除けば，火縄銃 tofang-e fetīle の7967挺に次いで2番目に多く，他の外国製小銃，すなわち「フランス銃 tofang-e Farānse」7挺，「ロシア銃およびオスマン銃 tofang-e Rūsī va Rūmī」66挺をはるかに凌駕している。また，ピストル ṭapānche についても，イギリス製のものは全2785挺のうち826挺であり，これも「様々な motafarreqe（ピストル）」1828挺を除けば最も多い［fol. 7b］。

以上の内容から，イギリス製小銃がサルバーズによって広く使用されていたことが伺える。またイギリス製小銃はその他の外国産小銃を数量的に凌駕していたが，このことは，繰り返し述べているとおり当時のガージャール朝をめぐる外交関係に要因があると考えられる。一方で，エスファハーン銃やキズィルバシュ銃といったイラ

ンで製造されたと思われる小銃も依然として使用され続けていたことも明らかとなる。

アッバース・ミールザーによって創設されたサルバーズは，彼の指揮下で対ロシア戦争のみならず1820年代のオスマン帝国との戦闘，1820年代後半以降の東方州平定など様々な局面で運用された。また，モハンマド・シャーが即位する際にはタブリーズからテヘランへの進軍に加わり，さらにはベシューンの指揮下で新シャーの即位に反対するファールス州総督の討伐に派遣された［Fraser 1840: vol. 2, 282-286; Fowler 1841: vol. 2, 201-202］。そして，モハンマド・シャーの治世下でシャー直属の中央軍の中核となったサルバーズは，1837年のヘラート遠征は言うまでもなくその後の地方反乱の鎮圧などに活躍した。こうした軍事活動を物的側面から裏付けたのがイギリス製の小銃であったということが出来る。

このように，イギリス帝国からガージャール朝に供与されたイギリス製小銃は西欧式歩兵部隊サルバーズの創設に大きな影響を与えた。そしてこの展開は，イランにおける軍隊のあり方をも変化させるものであった。従来ガージャール朝の軍隊は不正規騎兵を主力としたが［Malcolm 1815: vol. 2, 495］，火器を装備した大規模な常備歩兵部隊であるサルバーズが創設されて以降はこの部隊が軍の基幹戦力となり［Cronin 2009: 64］，サルバーズの語は次第に兵士一般を指すものとして普通名詞化していく。このことは，イラン史上における軍隊の構成要素の決定的変化という点で一大画期であり，それを後押ししたという点からもイギリス製小銃の導入は大きな意味を持つ。またこの部隊は，初めはアッバース・ミールザーの軍隊として，次いでモハンマド・シャー直属の中央軍として，対外遠征のみならず支配領域内の反乱・騒擾の鎮圧にも当たった。当時イギリス帝国の対ガージャール朝政策が中央政府の軍事力強化を通じてイランの政治的安定を図るものであったことを考慮するならば，この部隊の創設はガージャール朝の中央・地方関係を前者に有利な形に転換させる作用を果たしたと考えられるが，この点についてはさらなる検討が必要であろう。

ただし，サルバーズ以外の軍隊のその他の構成要素に対しては，19世紀前半時点でイギリス製小銃の影響力はいまだ限定的なものであったと考えられる。マーザンダラーン出身兵によるイギリス製小銃装備の事例［Ouseley 1819-23: vol. 3, p. 243 (note)］や，サナンダジュのヴァーリーがサルバーズをまねて創設した西欧式歩兵が「シャーから購入した」イギリス製マスケットで武装していたという記述［Rich 1836: vol. 1, 216］から，イギリス製小銃が諸地方勢力の部隊にも配備されていたことが判明するものの，その事例は管見の限り上記２例に限られており，イギリス製小銃の導入はその直接の供与対象たるサルバーズにほぼ限定されていたと考えられる。また前章でも述べたとおり，在地の小銃製造業の盛行や当時の小銃の技術的水準を背景として，軍隊外の一般の人々の間でもイギリス製小銃は普及していなかったと推測されるので，イラン社会総体からみればイギリス製小銃の影響力はいまだ限定的なものであった。さらに，サルバーズによって一定数の現地製小銃が使用され続けていたことは，現地製小銃のプレゼンスという観点から注目すべきであろう。イギリス製を含めた西ヨーロッパ・北米製の小銃が密輸などを通じて大量に流入し，イラン社会に決定的な影響を及ぼすようになるのは19世紀後半を待たねばならない。

４．小銃製造技術の移入とその意味

19世紀前半におけるガージャール朝下での西ヨーロッパ地域の軍事技術摂取という潮流の中で，小銃製造技術の分野においても新たな動きが見られた。1815年にアッバース・ミールザーが５名の留学生をロンドンに派遣したが，その５名のうちにオスタード・モハンマド・アリー Ostād Moḥammad ‘Alī なる銃鍛冶が選ばれたのである。この人物はタブリーズでイギリス人の指導の下学んでいたために派遣生に選ばれたという［Ringer 2001: 29］。彼はロンドンにおいて銃製造を学び，1819年にタブリーズに帰還した。帰国後，彼はタブリーズで兵器生産に従事し，1835年からはテヘランの鋳造所を主管して兵器庫長 qūrkhānechī-bāshī の称号を得たという［Ringer 2001:

30-32; Floor 2003: 260]。

新技術の流入を背景として，イランにおける小銃生産も新段階に入ったと考えられる。まず，イギリス製小銃の模造，すなわち「イギリス式小銃」の製造が行われるようになった。ペルシア語年代記はイランの銃鍛冶たちが武器庫 jobbekhāne-ye sarkār においてイギリス製小銃と同型の小銃の生産を始め，短期間で20000挺を製造したと述べる［Donbolī 1352: 132; E‘težād al-Salṭane 1370: 291］。また，タブリーズのバーザールではイギリス帰りの銃鍛冶―前述のオスタード・モハンマド・アリーを指すのであろう―がロンドン製ライフル銃を模造し，「ロンドン銃 London guns」として売り出したという［Fowler 1841: vol. 1, 264］。そのほかにも，イギリス製小銃の模造に関する記述が報告されている(26)。

また，発射機構のみイギリス製のものを利用した小銃も製造されていた。エルグッドは19世紀前半にイランで製造された小銃の中に現地製の銃身・銃架とイギリス製の発射機構を持つ銃があることを指摘している［Elgood 1995: 123］。彼が提示した２挺の銃，すなわち1835年ころに作られた小銃と1820年代製造のピストルの発射機構にはそれぞれ，ロンドンの銃鍛冶トーマス・ポット Thomas Pott の銘と東インド会社の紋章が確認できる［Elgood 1995: 123-124, 201］。また1850年代初頭のエスファハーンでもグルジア製の銃身にイギリス製の発射機構が取り付けられていたという［Binning 1857: vol. 2, 130］。

フリントロック式発射機構については既に述べたが，19世紀後半のエスファハーンの地方誌は「発射機構職人たち jamā‘at-e chakhmāq-sāz」の項で，「イギリスの非常に良いフリントロック式発射機構 chakhmāq-e Angrīzī-ye besiyār khūb がもたらされた」と述べ，イギリス製発射機構がイランに流入して高く評価されたことを示唆するほか，イギリス製発射機構がモハンマド・シャー期の現地産のそれの半値で取引されていたとし，理由としてイランの職人はすべてを１人で製造するのに対してイギリスの職人が分業体制をとっていることを指摘する［Taḥvīldār 1342: 108］。19世紀前半の状況を示していると思われるこの記述は，当時のイランとイギリス本国の小銃製造

体制の相違を如実に表している。イギリス小銃製造への工作機械の導入以前，部品の調整や結合が多数の熟練した職人による分業体制によって実現されていたが［横井 1997: 96］，この製造体制の相違がイギリス製発射機構の高評価と低価格に帰結したと考えられ，イギリス製発射機構の利用はこうした状況への一つの対応であったといえる。また，イギリス製発射機構を持つ小銃には当時の在地製小銃に一般的な象嵌細工などの装飾がなされる事例があるので(27)，イギリス製発射機構の利用は装飾と発射機構の性能の両立を目的としていたとも推測できる。

ただ，「イギリス式小銃」の製造やイギリス製発射機構の利用の事例は，イランの銃鍛冶がこれら作業を行う上での技術的な障壁が一般に考えられるほど大きなものでなかったことの証左ともなる。この推論を裏付けるのが当時のペルシア語兵器技術書の記述である。

19世紀前半に翻訳・編纂された兵器技術書のうち，残存しているのは管見の限りモハンマド・シャー期に編纂・翻訳された4点である(28)。これらの技術書は，ヘラート遠征において浮き彫りにされた軍事上の問題点を改善すべく，宰相ハーッジー・ミールザー・アーガースィー Ḥājjī Mīrzā Āghāsī の肝いりで編纂・翻訳されたものである(29)。しかしながら，そのどれにも小銃そのものの製造に関する記述が含まれていない。小銃に関連するものとしては僅かに，*Savā'eq al-neẓām*［fols. 81b-82a］，*Resāle dar 'elm-e qūrkhāne*［fols. 44b-61b］において歩兵用薬莢 feshang-e sarbāzī の製造方法が記述されているのみである。

このことは，熟練手工業に依存する点でイランとイギリス本国の小銃製造技術との間に大きな違いが無かったこと，当時のイランとイギリス本国製の小銃の基本的構造が，発射機構以外の点ではかなり共通していたことを踏まえれば理解できるであろう。すなわち，イギリス製小銃の構造は現地の銃鍛冶にとって理解可能なものであり，あえて兵器技術書に記載する必要があると考えられていなかった可能性がある。唯一記述の対象となった歩兵用薬莢は，17世紀前半に発明されて既に西ヨーロッパ地域では普及していたが［ヨルゲ

ンセンほか 2012: 74］，当時イランでは知られておらず，新機軸として記述されたと思われる。ただし，この推論はあくまで現時点での暫定的なものに過ぎないことを付言しておく。

お わ り に

19世紀前半のイギリス帝国からイランへの小銃の導入は当時の政治・外交的状況を反映し，基本的にイギリス帝国側が主導する武器供与という形で行われた。すなわち，この時期の小銃及び技術の移転は政府側の主導もしくは承認のもとでの「公式」のものにほぼ限定されていたといえる。イギリス製小銃は西欧式歩兵部隊サルバーズに配備され，ガージャール朝の中核となった同部隊の活動を物的側面から支えた。また，イギリス帝国からの小銃流入を発端とするこの一連の現象は，イランにおける軍隊のあり方やガージャール朝中央政府と地方勢力との力関係にも影響を与えたと考えられる。

ただ，政府側の関知しない「非公式」な小銃流入が限定的であったこともあって，小銃導入の影響はあくまでサルバーズに限られ，軍隊のそれ以外の構成要素や軍隊外に対するその影響は大きくはなかった。また，現地でのイギリス式小銃の製造やイギリス製発射機構の利用も開始されたが，このことはイギリス帝国とイランの小銃関連技術上の格差が一般に考えられるほどには大きくなかったことを示唆する。イギリス帝国の小銃および関連技術が全き優位性を確保していないという本論考の分析結果は，西ヨーロッパ地域の火器技術が世界史上でプレゼンスを高めていく過渡的な状況を示すものであると思われる。

既述の通り，世紀後半には西ヨーロッパ地域および北米で小銃の製造・流通・使用に大変動が生じるが，イランとイギリス帝国を取り巻く事情についていえば，供給元としてのイギリス帝国の存在感の低下と供給元の多様化，ガージャール朝による主体的な小銃調達の本格化，さらには「非公式」な小銃流入の拡大と地方勢力の武装化などが観察され始める。これら諸現象はイランにおける小銃とその製造のあり方の変化という問題のみならず，現在見られるような

西ヨーロッパ地域及び北米の兵器技術上の優位の歴史的起源という問題を考える上でも重要であると考えられるが，この問題の検討については他日を期したい。

参考文献

一次史料：未刊行史料

National Archives（Kew）

FO60: Foreign Office: Political and Other Departments: General Correspondence before 1906, Persia.

FO248: Foreign Office and Foreign and Commonwealth Office: Embassy and Consulates, Iran（formerly Persia）: General Correspondence.

The British Library（London）

F/4: India Office Record: Records of the Board of Commissioners for the Affairs of India: Board's Collections, 1620-1859.

L/PS/9: India Office Record: Records of the India Office Political and Secret Department: Correspondence on Areas outside India, 1781-1911.

Ājūdābāshī, Ḥoseyn. *Ketābche-ye tūpkhāne*. MS at Golestan Palace Library（No. 807）.

Semino, Barthélémy, and Moḥammad Ḥasan Shīrāzī. *Ketāb-e handese-ye neẓāmī*. MS at the National Library of Iran（No. f1829）.

Tabrīzī, Moḥammad Bāqer. *Resāle dar 'elm-e qūrkhāne*. MS at the National Library of Iran（No. f1766）.

Tabrīzī, Reżā. *Resāle-yī dar feshang*. MS at the National Library of Iran（No. f 1055）.

……. *Savā'eq al-neẓām*. MS at the National Library of Iran（No. f1698）.

一次史料：刊行史料

Binning, Robert B. M. 1857. *A journal of two years' travel in Persia, Ceylon, etc*. 2 vols. London: Allen and Co.

Buckingham, James Silk. 1830. *Travels in Assyria, Media, and Persia*. 2 vols. London: H. Colburn.

Fowler, George. 1841. *Three years in Persia, with travelling adventures in Koordistan*. 2 vols. London: H. Colburn.

Fraser, James Baillie. 1826. *Travels and adventures in the Persian provinces on the southern banks of the Caspian Sea*. London: Longman et al.

……. 1834. *An historical and descriptive account of Persia, from the earliest ages to the present time*. Edinburgh: Oliver and Boyd.

……. 1838. *A winter's journey* (*Tâtar*) *from Constantinople to Tehran, with travels through various parts of Persia, etc*. 2 vols. London: R. Bentley.

……. 1840. *Travels in Koordistan, Mesopotamia, &c., including an account of parts of those countries hitherto unvisited by Europeans*. 2 Vols. London: R. Bentley.

Holmes, William Richard. 1845. *Sketches on the shores of the Caspian: Descriptive and pictorial*. London: R. Bentley.

Jones Brydges, Harford. 1834. *An account of the transactions of his Majesty's mission to the court of Persia, in the 1807-11*. 2 vols. London: James Bohn.

Malcolm, John. 1815. *The history of Persia, from the most early period to the present time: Containing an account of the religion, government, usages, and character of the inhabitants of that kingdom*. 2 vols. London: John Murray.

Morier, James Justinian. 1812. *A journey through Persia, Armenia, and Asia Minor, to Constantinople, in the years 1808 and 1809*. London: Longman et al.

Ouseley, William. 1819-23. *Travels in various countries of the East, more particularly Persia*. 3 vols. London: Rodwell and Martin.

Parliamentary Papers: Reports etc. (*East India Company*). First part, vol. 7. 1812-13.

Pottinger, Henry. 1816. *Travels in Beloochistan and Sinde*. London: Longman, et al.

Rich, Claudius James. 1836. *Narrative of a residence in Koordistan, and on the site of ancient Nineveh*. 2 vols. London: James Duncan.

Donbolī, ‘Abd al-Razzāq. 1352（1972）. *Ma’āser-e Soṭānīye: Tārīkh-e jang-hā-ye Īrān va Rūs*. Tehran: Enteshārāt-e Ebn-e Sīnā.

E‘teżād al-Salṭane, ‘Alī Qolī. 1370（1991/92）. *Eksīr al-Tavārīkh: Tārīkh-e Qājārīye az āghāz tā sāl* 1259 *q*. Tehran: Mo’assese-ye Enteshārāt-e Vīsmen.

Lesān al-Molk Sepehr, Moḥammad Taqī. 1377（1998/99）. *Nāsekh al-Tavārīkh: Tārīkh-e Qājārīye*. 2 vols. Tehran: Enteshārāt-e Asāṭīr.

Shīrāzī Khāvarī, Faẓl allāh. 1380（2001/02）. *Tārīkh-e Ẕū al-Qarneyn*. 2 vols. Tehran: Sāzmān-e Chāp va Enteshārāt-e Vezārat-e Farhang va Ershād-e Eslāmī.

Taḥvīldār, Ḥoseyn. 1342（1963）. *Joghrāfīyā-ye Eṣfahān: Joghrāfīyā-ye ṭabī‘ī va ensānī va āmār-e aṣnāf-e shahr*. Tehran: Enteshārāt-e Moṭāle‘āt va Taḥqīqāt-e Ejtemā‘ī.

二次文献

Calmard, Jean. 1989. “Les réformes militaries sous les Qâjâr（1794-1925）.” in Yann Richards（ed.）, *Entre l‘Iran et l‘Occident: Adaptation et assimilation des idées et techniques occidentales en Iran*, Paris: Fondation de la Maison des sciences de l‘homme, 1989. pp. 17-42.

Chew, Emrys. 2012. *Arming the periphery: The arms trade in the Indian Ocean during the age of global empire*. London: Palgrave Macmillan.

Cronin, Stephanie. 2009. “Bulding a new army: military reform in Qajar Iran.” in Roxane Farmanfarmaian（ed.）, *War and peace in Qajar Persia: Implication past and present*, New York: Routledge, 2009. pp. 47-87.

Ebrahimnejad, Hormoz. 1999. *Pouvoir et succession en Iran: Les premiers Qâjâr, 1726-1834*. Paris: Société d‘Histoire de l‘Orient.

Elgood, Robert. 1995. *Firearms of the Islamic world in the Tareq Rajab Museum, Kuwait*. London: I.B. Tauris.

Floor, Willem M. 2003. *Traditional crafts in Qajar Iran*（*1800-1925*）. Costa Mesa: Mazda.

Matthee, Rudi. 1996. “Unwalled cities and restless nomads: Firearms and artillery in Safavid Iran.” in Charles Melville（ed.）, *Safavid Persia: The history and politics of an Islamic society*, London: I.B. Tauris, 1996. pp. 389-416.

…….1999. “FIREARMS, i. HISTORY.” *Encyclopaedia Iranica* IX, fasc. 6: 619-628.

Ringer, Monica. 2001. *Education, religion, and the discourse of cultural reform in Qajar Iran*. Costa Mesa: Mazda.

Sengers, L. G. 1965. “A pistol of Prince Farhad Mirza.” *Persica* 2: 71-72.

Wright, Denis. 1977. *The English amongst the Persians: Imperial lives in nineteenth-century Iran*. London: Heinemann.

Yapp, Malcolm Yapp. 1980. *Strategies of British India: Britain, Iran, and Afghanistan, 1798-1850*. London: Clarendon Press.

Maḥbūbī Ardakānī, Ḥoseyn. 1354(1976)(rep. 1370(1992)). *Tārīkh-e mo’assesāt-e tamaddonī-ye jadīd-e Īrān*. 3 vols. Tehran: Mo’assese-ye Enteshārāt va Chāp Dāneshgāh Tehrān.

Modarresī, Yaḥyá, et al. 1380 (2001/02). *Farhang-e eṣṭelāḥāt-e dower-ye Qājār, qoshūn va naẓmiye*. Tehran: Daftar-e Pezhūhesh-hā-ye Farhangī.

近藤信彰．1993.「ヤズドのモハンマド・タギー・ハーンとその一族: 十八・十九世紀イランにおける地方有力者の実像」『史学雑誌』102-1：1-36.

…….1998.「ハーッジー・エブラーヒーム（Hajji Ebrahim）と1791年政変」『オリエント』41-1：125-140.

長谷川久美．1992.「ヌーリー家とカージャール朝初期のファールス地方」『史林』75-6：1-32.

ヘッドリク，D. R. 原田勝正ほか（訳）．1989.『帝国の手先：ヨーロッパ膨張と技術』東京：日本経済評論社.

横井勝彦．1997.『大英帝国の〈死の商人〉』東京：講談社.

ヨルゲンセン，クリステルほか．竹内喜，徳永優子（訳）．2010.『戦闘技術の歴史 3　近世編』東京：創元社.

註

（1）　シャーは火縄銃で武装した騎兵を近衛兵として維持し，ファールス州にもこれを模したマーザンダラーン出身者からなる銃騎兵が存在した

という［長谷川 1992: 9-10］。

（2） マテーはケルマーン，シーラーズ，ヤズドの火器生産に言及している［Matthee 1999: 624］。他にテヘラン［Holmes 1845: 353］，エスファハーン［Binning 1857: vol. 2, 130］，ケルマーンシャー［Buckingham 1830: vol. 1, 193］での小銃生産についても旅行記に言及がある。

（3） ［Donbolī 1352: 132］。ただ，該当箇所は彼らの製作した小銃と同じ様式のものがガージャール朝下でも製造されたとするのみで，彼ら自身がいつの時代の人間か判然としない。

（4） ペルシア製小銃はアジア全域で高く評価されていたという［Binning 1857: vol. 1, 186］。ケルマーン製の火縄銃についても同じような記述がある［Pottinger 1816: 226］。

（5） ［Elgood 1995: 119-120］。ただエルグッドはこれについて具体的な史料を挙げていない。

（6） ［Fraser 1826: 308-309］。またローリンソンによれば1830年代にタブリーズの武器庫は武器の修理能力を有していた。FO248/76, Rawlinson to Campbell, July 12, 1835.

（7） 19世紀前半の状況は判然としないが，19世紀後半について一例をあげれば1870年代時点のエスファハーンには銃鍛冶が40名いたとされる［Floor 2003: 248］。一方，19世紀中葉のバーミンガムでは7000名を越える労働者が小銃製造に携わっていた［Chew 2012: 57］。

（8） L/PS/9/82, Wellesley to Mirza Abul Hassan, March 6 1810; Duncan to Jones, January 11, 1811.

（9） FO60/4, Astell to Hamiliton, May 9, 1810; Admiralty Office to Hamilton, May 15, 1810.

（10） FO60/6, Ouseley to Court of Directors, March 21, 1812.

（11） FO60/16, Memorandum by Ouseley, et al., September 20, 1819; F/4/402/10102, Edmonstone to Thackeray, August 12, 1812.

（12） 前者については FO60/84, Secretary to the Governor of Bombay to Envoy in Persia, February 6, 1829; Bill of Military Secretary, February 23, 1829. 後者については FO60/40, Ellis to Meerza Massood, March 1836.

（13） L/PS/9/98, Campbell to Bengal Government, April 3, 1835.

(14)　FO60/35, Foreign Office to Commissioners of the Treasury, July 7, 1834.

(15)　FO60/35, Treasury Chamber to Backhouse, December 6, 1834.

(16)　FO60/40, Stoddart to Ellis, January 21, 1836.

(17)　FO60/46, Foreign Office to Ordnance Office, July 6, 1836; Byham to Backhouse, July 16, 1836. なお，フリントロック式発射機構用のフリントは大部分を輸入に頼っており［Binning 1857: 131］，イランでは大規模には産しなかったと考えられる。

(18)　FO60/61, Enquiry by Sheil, recd. in July 27, 1838.

(19)　FO60/84, Sheil to Aberdeen, May 21, 1842.

(20)　FO60/49, McNeill to Macnaughten, May 19, 1837.

(21)　FO60/91, Meerza Abul Hassan to Sheil, November 9, 1842.

(22)　［Binning 1857: vol. 2, 130］。［Elgood 1995: 123］もイギリス製ピストルの需要に言及する。

(23)　ファトフ・アリー・シャーは歩兵隊ジャーンバーズ Jānbāz を創設したが［Shīrāzī Khāvarī 1380: vol. 1, 273］，その編成地として挙げられたマーザンダラーンや，その後編成地として頻出するセムナーン，ダームガーン［Shīrāzī Khāvarī 1380: vol. 1, 304, et al］は元々シャーの近衛兵であるゴラームや銃兵隊の供給地であるため，既存の銃兵隊を再組織化・訓練したものと思われる。また，後に触れるファールス州の銃兵隊改革も同様の試みといえる。

(24)　［*Ketābche-ye tūpkhāne*: 5b-7a］から，1840年代の段階で西欧式歩兵部隊がアゼルバイジャン州のみならずイラン西部から中央部にかけての地域から徴用されていることが分かる。また，1834年にローリンソンが訓練していた部隊は，もとは前ケルマーンシャー州総督モハンマド・アリー・ミールザー Moḥammad ‘Alī Mīrzā（アッバース・ミールザーの兄）の部隊であった。FO248/76, memorandum of Rawlinson, April 29, 1835.

(25)　［Modarresī, et al. 1380: 142］は前装フリントロック式の小銃と記すのみであるが，名称からしてイラン製の小銃であると考えられる。

(26)　ウーズリーは，シーラーズの銃鍛冶がヨーロッパの職人が作る銃やピストルを模造する技量に優れていたと述べている［Ouseley 1819-23: vol. 2, 58］。またこうした模造行為は19世紀前半以降，イラン各地で行われて

いたという［Floor 2003: 248-265］。

(27)　エルグッドの挙げた 2 例のうちの後者。また，この時期の王子の肖像に描かれた小銃もイギリス製の発射機構を持ちつつ独特の装飾が施されている［Elgood 1995: 122, 124］。

(28)　*Savā'eq al-neẓām, Resāle-yī dar feshang, Resāle dar 'elm-e qūrkhāne, Ketāb-e handese-ye neẓāmī.* 本稿で利用した写本の書誌情報については参考文献を参照されたい。

(29)　ちなみに，4 点中 2 点の編纂・翻訳はオスタード・モハンマド・アリーと共にイギリス留学に派遣されたミールザー・レザー・タブリーズィー Mīrzā Reżā Tabrīzī によってなされており，ここにも軍事技術上のイギリスの影響力の大きさが見て取れる。

（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）